（社）全国酪農協会 ヨーロッパ酪農視察研修に参加して

ユングフラウ山地の最高峰　「ユングフラウヨッホ（3,571 m）」をバックに記念撮影）

全国酪農協会のヨーロッパ視察研修に参加された住田佑樹さん（庄原市東城町）から研修レポートを受けましたのでご紹介します。

（社）全国酪農協会主催のヨーロッパ酪農視察研修が、九月二日～十日の九日間行われ、これに参加しました。初日は、成田空港に全国から視察研修に参加する酪農家等の皆さんが集い、総勢二十五人の旅に出発しました。

■オランダの二つの視察先

成田空港から十時間以上のフライトを経てオランダに着きました。一件目はＣＲＶ（牛改良共同組合）です。この会社は「精液販売」、「牛群検定」、「体型審査」等を行い、オランダのアーネムに本社があります。ここでは、オランダの酪農情勢について研修を受けました。オランダの農家戸数は一万九千五百二十戸、総頭数は百四十七万七千頭で、一戸あたりの平均飼養頭数は七十五頭。日本と同じように飼養頭数が減り、将来的に一戸あたりの経営規模が大きくなって行くだろうと聞きました。

次に、オランダ東部のフィーラッケル地方の酪農家でフォトネンブール農場を視察しました。三年前に太陽光発電システムを導入し、年間消費電力の三分の二を太陽光発電で賄っていました。夫婦二人で経産牛百頭を搾乳ロボット二台で管理、牛舎の除糞作業も除糞ロボットで行い、作業は省力化され近代的な酪農形態でした。今後は、経産牛百頭から百三十頭に規模拡大したいと意欲的な牧場でした。

■スイスの山岳酪農を視察

ルッツェンタール地方にあるアルフレッド・コルブ農場を視察しました。

この地域では、六月から九月まで標高千七百メートルの山に牛を放し、その間、山の上で搾乳し、搾った牛乳でチーズを作っていました。この農場では二十頭の搾乳牛を飼養し、餌となる牧草は、牛舎周辺の草地や傾斜地で自

生する草を刈り取り、乾燥させて干草にし、冬場の餌としていました。この山岳地帯では、経営面積、頭数、標高等で補助金の金額が異なり、傾斜地がきつく、標高が高くなる程、補助金が高く、コルブ農場では年間約七百万円の補助金を受けているそうです。しかし、生産枠があり、牛乳一ℓの乳価が約四十八円と安く、健全経営が難しく、酪農経営の収入の大半を補助金が占め、酪農での収入は少ないそうです。酪農経営では生活が難しいので、冬はスキー場でアルバイトをしたり、老人ホームで働き生活費に当てているそうです。

（山岳酪農家で奥さんから説明を聞く参加者ら）

■フランス「モーペリチュイ農場」を視察

パリの郊外にある酪農家「モーペリチュイ農場」を視察しました。家族で搾乳牛七十頭を管理し、酪農の傍ら百二十haの畑で小麦、ビート、デントコーンを作付けしていました。

飼養体型はフリーストール牛舎で、ミルキングパーラーは五頭ダブルのヘリングボーン。TMRはデントコーンサイレージ主体の給与でした。この農場は、「後継者がいない」、「乳価が安く収益性が低い」との理由から、数年後には酪農を辞められると聞きました。

■自らの目で見て、肌で感じる海外視察

今回、ヨーロッパ酪農視察研修に参加して、海外の酪農形態や酪農情勢を直接見て、肌で感じることが出来ました。そして、全国の酪農家や酪農関係団体の方々と交流出来ることができ、良い経験が出来ました。研修に参加できる環境を与えて下さった皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。有難うございました。

酪農ヘルパー研修会　9/11　本所会議室

酪農ヘルパーのスペシャリストを目指す

広酪ドリームブリッジ構想に掲げるコントラクター制度、酪農ヘルパー事業の一体的取り組みを模索し、酪農ヘルパー要員のスキルアップを目的に先進地の北海道から「有限会社標茶営農サポートセンター」の長尾正志取締役常務と高橋明課長の二名を講師に招き、委託酪農ヘルパー員、事務局職員などを含めた二十七名が参加して酪農ヘルパー研修会を行った。

研修では、コントラクター体制の整備運営と酪農ヘルパー事業の一体的取り組みをテーマに「運営の現状と課題」とともに、同センターのヘルパー業務の内容等の先進地事例の紹介を受けた。

参加したヘルパー員からは「広島県内の酪農家のニーズに応えていけるよう個々のヘルパー員が成長する必要があり、高橋課長のように大規模農家を少人数で作業できる能力アップと緊急時の迅速な出役調整への対応等、ヘルパー員としてのスペシャリストを目指して、しっかり勉強したい」との感想があり、酪農ヘルパー事業の円滑な派遣対応とコントラクター体制に向けて参考となった有意義な研修であった。